

41) 膵全摘にて切除可能であった膵癌の2例

佐藤 賢治・佐藤 巖主 (南部郷総合病院)
鰐淵 勉・篠川 (外科)
加藤 知邦
滝沢 英昭・渋谷 隆 (同 内科)
酒井 一也
古田 耕 (新潟大学 第一病理)

第一例は76歳女性で、黄疸を主訴に入院、体尾部への浸潤が疑われる膵頭部癌と診断し、膵全摘施行した。しかし、術後 CEA が再上昇し、多発性肝転移を CT にて認めた。第二例は74歳男性で、上腹部痛を主訴に来院、慢性膵炎として一年経過観察後、精査目的に入院した。ERCP 上乳頭は著明に腫大、大きく開大した開口部より粘稠な排液があり、膵管造影、CT、腹部エコーにて膵管の著明な拡張を認めた。粘液産生膵癌と診断し、膵全摘施行した。術後経過は良好で、3カ月を経た現在再発は認めない。1982年大橋らが提唱したいわゆる粘液産生膵癌は ERCP 上腫大した乳頭、大きく開大した開口部よりの粘液の排出を特徴とし、比較的予後良好とされてきた。しかし、報告例の増加に伴い、組織型が一定しない、予後不良例があるなど問題点をはらんできた。特異な臨床像を呈する一つの疾患群とみるべきという意見が多いが、今後の検討が待たれる。

42) 粘液産生胆管癌の1例

星山 圭鉸・松尾 仁之 (金沢病院外科)
佐藤 攻・白井 良夫 (新潟大学 第一外科)
内田 克之・伊賀 芳朗
福田 喜一・川口 英弘
吉田 奎介・武藤 輝一

粘液産生胆管癌は比較的稀であり、その診断、治療も非粘液産生胆管癌に比べ、特徴があるようである。われわれは画像診断上でも興味ある像を呈した症例を経験したので報告する。症例は74才の女性、昭和62年3月上旬、白内障の手術のため入院したが、上腹部の膨満感、食欲不振あり、精査を行った。

US 所見では総胆管内に肝実質と等エコーレベルの陰影あり、CT 所見では拡張した総胆管内腔に腫瘍性病変を認めた。ERC 所見では下部から上部胆管にかけて著明な胆管拡張と陰影欠損像を認めた。総胆管結石又は胆管癌の疑いで手術施行。拡張した総胆管を切開すると6.0×4.5cmの粘液塊を混じた乳頭状の腫瘍が突出し、乳頭型亜有茎性の粘液産生胆管癌と診断、膵頭十二指腸切除術を施行した。病理組織学的には Pat Bs-mc, papillary adeno carcinoma, m, lyo, vo hinfo, ginfo panco,

do, vso, n (-) hwo, dwo, ewo の早期胆管癌であった。

43) 脾のう腫の1例

千田 匡・長谷川 滋 (厚生連長岡中 央病院 外科)
金沢 信三・斉藤 聡郎
角原 昭文 (県立小出病院 外科)
原 滋郎・金子 一郎

症例；46歳女性。

既往歴；特記すべきことなし。

現病歴；昭和62年6月集団検診で、膵仮性のう胞、または脾のう腫を疑われ、県立小出病院外科で精査され、当科へ紹介入院となる。腹部超音波検査；脾内部やや上方に9cm大のう腫。CT；同様に脾前面に9cm大のう腫を認めた。血管造影；脾動脈が脾内部で著明に圧迫伸展、腫瘍血管は認められず、mass は大きな avascular area として示現された。Splenic cyst の診断のもとで10月13日手術、脾摘施行。病理所見；Cystic lymphangioma of spleen。文献的考察を加え報告したい。

44) 当科における温熱療法の経験

田中 典生・井上雄一郎 (日本歯科大学)
川合 千尋・松木 久 (外科)
新国 恵也・村上 博史 (新潟大学 第一外科)

最近、癌の温熱療法が、それ単独あるいは化学療法、放射線療法との併用で行なわれ、その効果が期待されている。

腫瘍細胞と正常細胞の温熱感受性には差があり、42℃前後の加温により腫瘍血流は減少し、低酸素、低栄養、pH の低下が引き起こされることにより抗腫瘍効果があるといわれている。また、温熱によりある種の抗癌剤および放射線の作用が增強されることが実験により認められている。

我々は、手術的に切除不能であった5症例(膵癌2例、胆管癌1例、胃癌再発1例、原発性肝細胞癌1例)に対して、単独あるいは化学療法との併用で温熱療法を行った。そのうち3例は死亡したが、残りの2例は現在外来にて継続し、その効果を追跡中である。

当科における温熱療法の方法および効果について若干の文献的考察を加えて報告する。